

小説 461頁 51新
 丹波 451頁
 1905 年 451頁
 2,003 - 3,220
 1907. 3/4
 1979
 473
 40P
 1286

相剋 1286
 両者が互いに争うこと

第三十章 相剋

来ぬ人

南国、設馬国（投馬国、薩摩国）の彌彌那
 利の館では、夫梯僂の身に起った出来事の
 となど何も知らない赤女が、――いらい
 くも、それそれな加う、まだかまだかとい
 を探人していた。

赤女は、玉匣（玉飾りのある化粧箱）の中から
 手鏡や朱丹などを取り出しては、お化粧に余念
 かなかつた。そして首から胸元へと連なる勾玉の
 向きを確かめたり、領巾の垂れ具合をいじり変え
 たり等々、美しい姿になお一層の装いを凝
 らして、来ぬ人、梯僂を待つてゐるのだつた。
 一方で、――あまりに
 厚い巾・一体、いつこにお着きになるのか
 赤女は、待ち切れず、岬（今の長崎鼻）の

「おかげさまで」 2011^P 597
 2012^P 397
 グループワークス九州 玉手箱 44 枚開神社 456^P 岸壁
 1907^P 5 1907-1/2

2,003^P - 2/3

岸壁に立ちつくしていつと西方へ開闢岳の方を見
 つめ続けた。(写真図版 350 参照)
 なお、余談ながら、因みに述べると、
 神武天皇即位の後、勅命によって祭祀さ
 れたと伝える枚聞神社(開闢岳の北三基)には、国
 宝とされてゐる玉手箱(松梅蒔繪櫛笥一口)
 附属品並目録共)がある。そしてまた、長崎
 鼻には浦島太郎の伝説を伝える竜宮神社があ
 る。
 という。(「日本社寺大観」名著刊行会へ枚
 聞神社)。九州に深水宗孝、実業之日本社
 ニーハ負参照)写真図版 330 へ枚聞神社の玉手箱
 あるいは、
 へこの開闢神社から長崎鼻にかけての地域
 のどこかに、彌彌や彌彌那利の屋敷があつた
 のかも知れない。
 などと想像される。

米

地名辞 397 頁に
 南端・開闢
 岬

2,003^P- 3/3

- ・ 頁の $\frac{1}{4}$ の大きさ
- ・ 頁の左上に載せる。

(A-A')

* 山の下の線が A
水平になるよう、
配置して下さい。



13QG

14QG

写真図版350 長崎^{ながさき}鼻^{はな}から見た開聞^{かいもん}岳^{だけ}

『指宿市誌』指宿市役所、昭和60年10月25日発行、679頁参照。

妊 1992^p

2004^p

つふや 口玄く 元1496^p あんげす 元40^p 問 質す 元1557^p

2002^p -3/4

越え

だが、噂は流水流れてゆき、
千里の波濤を越え、
知るところとなつてまつた。
あのお方が阿胡根の浦に来られたのはな

つた時、女王様が後から追いつかぬ
梯傍様に呪文をかけて目を眠らせになり、
和馬台国の都の御殿の内へ連れてゆか
れたまゝになつた。というのですか

はつきり

赤女は、そう問ひ質さずに
赤女の胸は騒いだ。
赤女は、その本当のところを

愛する人が、堅魚釣り、鰯釣りに打ち興
ら水たという阿胡根の浦が、船縁のすぐ
かに見えてきた。

悲しくも波間に漂つていた。
あふれる涙で滲んだ小さな島々が
墨真図版 347 大島小島

「あのお方は、ここまで来てくださいましたの

1986-7/2 373 20 20x21 ①

205

S 60.1.31
H 7.4.9
H 10.8.1

2,005^P

まなし
眼差 2088^P

ね
赤^{あか}女^めは、胸^{むね}う^うち^ちふ^ふる^るわ^わせ^せく^く近^きい^いて^てい^いた^た。
あ^ああ、梯^{てい}鳥^ゆ様^{さん}は^は今^{いま}、ど^どの^のよ^よう^うに^にお^お過^{すご}い^いに
な^なっ^って^てお^おい^いで^でな^なの^ので^でし^しよ^うう^う
と^とめ^めど^どな^なく^く糸^{いと}小^こ落^おち^ちる^る涙^{なみだ}を^を振^ふり^り松^{まつ}お^おう^うと^とも
せ^せず、^{あか}赤^め女^めは、^や邪^め馬^め台^の国^この^な都^{みやこ}の^な方^{ほう}、^ふ船^{ふね}の^へ舳^{さき}先^きの^へ
彼^{かなた}方^{かた}を^を見^み詰^つめ^めて^てい^いた^た。続^{つづ}け^ける^るの^のだ^だっ^った^た。

米

たいそう
大層 1341

万々- 205P

2,006P

21す
指図 885P
久定 1711P

ひき
引切り

(心)

赤女の嘆き

(佳吉)

赤女が墨吉の疎に着いたとき、そこは常

と変わることなく熱気に包まれていた。

飾りたてた大小の船からさまざまな荷が

ひっきりなりに運びおろされておろ、水夫やら荷場

人足やらが右往左往していた。

へ唯か、詳しく知っていろいろな人はいないかしら

赤女はあたりを見廻しながら船を降り、

海辺に歩いていった。

その時、人夫等に指図している彌馬升の姿

を認めた。

彌馬升殿。彌馬升殿ではありませぬか

やってきた彌馬升は、赤女に尋ねられるま

まに、知っている限りのことを答えた。

先帝の皇后日御子と梯偶様とは、海若の神の宮の

内の重の妙なる殿に手に手を取って、入って

ゆかれたのでした。そしてそれから、禁中で

婚儀が催され、女夫になられたということ

です。しかし世間のうちのある者は、

のぐとの秩序が乱れたと、嘆いており

ますか、しかし梯偶様は神山(阿蘇山)の火

2047

寛容 508

2007

2007

改行

嫉妬

男のようなものです。男の恋の炎があちこちに飛び火したとしても、何とも致し方ないことなのであります。我が国では、こういう事は全て神山の火男の所為にして見て見ぬふりをし、まま寛容視するところがあるのです。赤女様のお気持ちもお察し申し上げますか、いま暫くはそっとしておいてあげていたたきとう存じます。彌馬升は、赤女に同情を寄せながらも、これはやはり成り行きを見守るしかありません。首を横に振るのだった。

赤女にとって、それは辛いことであつた。そして優しかった夫を慕つて泣き暮らす日々が続いた。

しかるに倭国では、女が妒忌（嫉妬）し、うものならば極端なまでに忌み嫌ひをする為（ため）である。赤女は、表向きは少しも氣にしていないうような、穏やかな様子を繕（つくろ）うなければならなかつた。

ことさらなまでに

2.008P

三国志(茶)II-295下 魏志倭人伝 46,
とくに46頁が嫌わ 後漢 57,
新(1)-345年 隋 43

どこかに似た文章が
あったように見える?

「私は、とうす小ばいいの、ただ、泣くこ
とだけ、か評されないのね」
赤女は、~~父~~の、~~内~~に、~~おとこ~~夫婦を慕って、忍び泣き
に泣き暮した。
後漢書倭伝、隋書倭国伝、~~日~~三国志、魏書
東夷伝、扶余条へ特に嫉妬が嫌われる、参照
*

泣いてどうなるものでもないけれど

こと

854P
再会 再び会うこと
「ハロ」
252P
*上洛ではおかしい。
ハロ、男児誕生

56P
嬉嬉 うれしそうに笑っている

1680P
愛姫 2003
-1/2 妹 待つ

2009P

1979-2/2
18行
檀日浦 ひとと 370P

愛姫へ男児出産
ではその頃宇治の父母の家へ帰った愛姫は、

どう過ごしていたのだろうか。

身重の愛姫をいたわる父や母や親戚一同は皆

阿胡根の浦で梯儂の身に赴いた出来事

を、決して愛姫に知らせようと一なかった。

嬉嬉として、梯儂と会えるその日を待ちわ

びている愛姫の姿を見るにつけても、真実を

打ちあけるのは、―――――あまりにも

むごいところのように思われるからであつた。

「もう、いくらなんでも、梯儂様は伊邪国

へお着きになつたことでは、さきに、

七尋の和布を、このお腹の子の為にお願い

ただけねど、あの方は覚えて下さつておい

でかしら。いや、もう梯儂様のお船は、不

彌国の檀日浦のすぐ近くにまでもやつて来

いるのではないかしら。早く、檀日宮に行か

なくしてはいけなわし

愛姫の心は無邪気にも、檀日へと送り立つ

のだった。

なにか、梯儂と愛姫とが檀日浦で再会する
な」ということは、今となつてはい決して有

いた 抱く 元 117

「そんなある日」
2次

ひなう.
2次 元 1865

2,010P

い 得ないこととなつてしまつていた。
かしなから、3月のこと、ついに愛姫は
隠されて、いた事実を聞き知つた。
人まあ、何ということに、
愛姫は、驚き、言葉もなく戸惑うばかりで
あつた。
だが、いつか愛姫は、我が御中の子の父
がこの倭国に留まつてゐるというその結果に、か
えつて、心の安まる思いをさえ抱くに至つて
いた。
「私は、母になるのだもの、この子の爲に
も、気を強く持たなければいけないわ」
愛姫は、
「自分」の心に言いきか
せるようにつぶやいた。
＊
愛姫は、母と共に、筑後川を下り、有明海
を渡つて、邪馬台国への道を急いだ。
「できるだけ、夫・梯儼が居る所の近くま
で行つて産みたい」
と思つてのことであつた。
こうしてやがて、愛姫は、男の子を生んだ
姿はなかつた。その子の誕生を祝つてくれる父の

とくく1591 1076 2009 2.011 2010
 1076 2009 2.011 2010
 1076 2009 2.011 2010
 1076 2009 2.011 2010

ただ、
 ー梯僂様は、とても喜んでおられるそ
 うです。頼りなげな
 という風、風の便りが届いただけであつた。
 様が、一目、会いに来て下さるか、知れない
 ね。乳香、児を胸に抱いた愛姫は、心の内にそ
 う信じて辛抱強く待ち続けた。
 け、水ども、その悲痛な願いは空しく、いた
 ち、日に日に打ち重なつていった。
 そんなある日、禁裏の中の人になつてしま
 へれたのですよ。今となつてはもう、梯僂様にお
 会い出来るな、と思つてはなりません。いい
 え、ー会えばかえつて、貴女や、この子に
 災い、及び、で、よう、
 優、くも、歳、く、諄諄と諭す母の言葉に、
 愛姫は、こらえきれず、始めて泣いた。
 心の支えとしてきたものの全てが崩れ去つ
 てしまつたように思われ、世の現実のあまり

2.012^P

⑥ 再ひいた

*

の酔^{よめ}さに、――愛^{あい}姫^{ひめ}は泣^ないて泣^ないて、ただ
ただ泣^なき続^{つづ}けた。
「そういうことだったのよね。もーかいた
ら、などと思^{おも}ってみたりしていたのだけれど
梯^{てい}儼^{えん}様^{さま}は禁^{きん}中^{ちゆう}へお入^{はい}りになつたので、すもの、
どんなにお待^{まち}ちしていても、この子^こや私^{わたし}に会^あ
いに来^きて下^{くだ}さる筈^{はず}が、~~は~~な^{ハル}いのだわ
やかて泣^なき疲^{つか}れたとき、母^{はは}の勸^{すす}めにすなお
に従^{したが}い、愛^{あい}姫^{ひめ}は子^こを胸^{むね}に抱^だきしめ、宇^う治^ぢの
実^い家^かへと帰^{かえ}っていつた。

「小町」~~24~~ 8/15.10.8 論述 2365P
36P 4277解田

2013P
1 (こ)

さんせん
489P 27の完成
2026-3/2
かんこ
完工

正始4年P
2047
5250P

遷都

翌

時は流れ、正始三年（二四二）の春、
を迎えた。

それは格別な春であつた。

邪馬台国の新しい王城が、きらびやかな霞
輝きを放つて、
間近かとなり、

いよいよ王都が、タクマが原から、
菊池

郡合志原へ地に移されることになったのだっ

た。

とはいえ、邪馬台国の都が、肥後国・菊池郡

にあつたうと推測するのは、この物語が最

初でなく、すでに江戸時代から現在迄はし

ば論述されてきた

では、
江戶時代以降の「邪馬

台国九州説」のうち、
肥後国説・菊

池郡説が掲げられているものを参考迄に列記して

くことみよう。

佐伯有清 41? 佐伯有清 41?

坂田 1840 坂田 1840

佐伯有清 95 佐伯有清 95

5974-2/2 5974-2/2

2,014 2,014

小町 9/15, 10, 18 小町 9/15, 10, 18

287 287

国史 国史

幕末と明治初年の国学者近藤芳樹（一八〇

一、一八八〇）は、弘化三年（一八四六）に

征韓起源を著わし、邪馬台国肥後菊池郡

山門説をとえた。それは、和名抄の地

名を見つめたことであつたという。（研究史邪馬

台国）佐伯有清、吉川弘文館、四四一四五頁参照

白鳥庫吉（一八六五—一九四二）は、明治

四十三年に日倭女王卑弥呼考（「東亞之光」

五の六・七）を発表し、

「女王の領土は九州の北半にまたがり、そ

の都邪馬台国は、この全版図の西南部、すな

わち肥後国の内にあるべきことを信じた」と

思う。庫吉の「邪馬台国九州説」内藤虎次郎の「邪馬台国

と説いた。（「研究史邪馬台国」佐伯有清、

吉川弘文館、九五頁参照）

藤井甚太郎は、白鳥大和説の両説が発表さ

れた直後の明治四十三年八月に「邪馬台国の所

在に就て」を発表し、邪馬台国を肥後国域の

なかにおいた。（「研究史邪馬台国」佐伯有

清、吉川弘文館、一二八頁参照）

太田亮（一八八四—一九五六）は、日日本

古代史新研究を著わし、邪馬台国を肥後国

「小町」²⁴⁻¹⁰
37^p 42^p 70

2015^p
ニ

小野小町 2^p 36~37^p

天祖 元1548^p
天皇の祖先(天照大神)

菊池郡山門郷にあて、

「九州中において天祖の都城として最も適

当なのは、畿内ヤマトと同じ名をもつ肥の国

のヤマトの外ないし

と、そして、

「畿内のヤマトは此のヤマトの名を移した

のであろうし

と説いた。(「研究史邪馬台国」佐伯有清、

吉川弘文館、一九七頁参照)

このように、——邪馬台国肥後国(菊池郡

説は、長らく、根強く論じられてきたことが

分る。

もつとも、

「小町郡説の難点」としては、山門という漢

字ことに「明」の字の音韻の問題がある。

山門の「明」は、大和のときを示す漢字、す

なわち、邪麻騰、夜麻登、夜摩苔、邪魔等な

どのときを示す漢字の韻に一致しないし

とする見解がある。(「シンポジウム邪馬台

国」石井良助・井上光貞・創文社、一一一頁。他参照)

(*)

宮城(内院)を

続紀(向) ①-88^{末2行} ②2018^P ③①-79^P 2,016^{P-1/2}

紀下5/6^P 15^行 鎮祭
" 526^P 55^行 ②都

新城築城④1580^P-1/4
240年春~242年春

④とところで、洛陽城と同規模の壮大極まりな
都城を、そんなにも短期間(約二年間)の
うちに造営し得るものであろうか。と疑問視
される。だが、
それは、当然の疑念である。
①かし、はるか後代
「我が国の藤原京・平城京・長岡京・平城京など
短い期間内に造られたし、
更に

ということが思い起される。
①藤原京の場合は、持統六年五月二十三日に
鎮祭(いわゆる地鎮祭)が行われ、二年半後
の持統八年十二月六日に遷都された。(紀)
②平城京の場合は、元明天皇の和銅元年十二
月五日に鎮祭が行われ、一年三ヶ月後の和銅
三年三月十日に遷都された。(続紀)
という。

タクマが原の都の主要な建物と全く同様の
白川北岸の新しい都に
は、そんなに困難なことはなく、短期間
であらうと想像される。
* 遷都することが出来たので

出で
きた

2016年 2/2

日本の歴史読本 ⑬ 16, 9
⑤ 5359 ~ 5360

続紀 ⑥ 6-95, 100
⑤ 5358
読本 ⑬ ① 日本史 ⑬

桓武天皇は、延暦三年（七八四）五月十六
日、山背国（京都府）乙訓郡長岡村の地の旗
分をお命になり、六ヶ月後の同年十一月十
一日に長岡の新京へ都を遷された。（続紀）
四また、桓武天皇の延暦十二年（七九三）正
月に山背国葛野郡宇太村（現在の京都市）の
地を旗分して平安京の造営事業が始められ、
翌年（七九四）十月に桓武天皇は遷都の詔を
出された。（「日本の歴史」⑬ ③）読売新聞社
九頁参照）
という。
タタマが原の都の中樞部の建物と全く同様の
建造物も、白川北岸の新しい都に築くのであ
る。小は、極めて容易に、且つ短期間で
禁裏域部（内院）を造営し、遷都の
し得たのであろうと想像される。

*

類文か他に29所あり

2.0/7^P

他上114^P
151^P

② 他下48^P
50^P 25^P

藤原示は、持統・文武・元明の三代の都
他下602^P 言天原広野地 50-25^P
他下48^P

藤原宮から平城宮への遷都につい
て参考文に記せば、次のとおりであつた。

和銅三年（七一〇）三月十日に、

「持統天皇」^{（たけむすのひめみかど）}「高天原廣野姫天皇」^{（たかまの原のひめみかど）}・「文武

天皇」・「元明天皇」の三代にわたつて都と

されてきた飛鳥の^{（あすか）}「天高市」の^{（あまのたけち）}「藤原宮」か

ら、―――泊瀬川北岸の^{（はつせがわのきたがへ）}平城宮へと、都は

遷された。

*なお、神代紀上第七段一書第一、神代紀下

第九段一書第二に「天高市」とあり、飛鳥の

高市（今の^{（いまの）}橿原市・高市郡全域と、大和高田

市の一部）を天上にあるもののようになげ

ていて、注目される。

・ともあれ、高天原に見立てられていた飛鳥

の^{（あまのたけち）}「天高市」^{（あまのたけち）}「地」から、―――泊瀬川北岸の

平城の地へと、都は遷されたのだった。

*

紀下404^P注11

P

2022

$$1 \wedge x^u y \quad \bar{z}$$

日取 1882

ほくほう

卜定 2031

天皇または神仏の屋を他所へうつす。 - 2/189

2020
-1/2
10/11

コクヨ ケー20 20×20

2030³ 2 (31) と 2 (32)

220 π 格利达春 ④ 2013^P 7页 ~ 11页

→ 44.1.2 (木) ⑤ たいま 溜め息 元1400

2019^P

陰暦3月は今の5月か？
↓ 周暦とすると今の3月

1人くえ 真紅 1144^P

ら次へと続いた。それはそれは華麗な
遷宮の行列であつた。
真紅の太陽は大阿蘇の峯の上より出て、
いまは、タクマが原いちめんに燦燦ときらめ
くばかりの陽光を投げかけていた。
時は春、行く道のほとりに花々が咲き乱れ、
鳥たちは恋の歌を鳴き交わっていた。
実に長閑な春の日のことであつた。
月の明るい陽射しの中を、鸛輿に乗ってゆ
つたりと行く日御子の姿はたとえようもなく
豊かであり、高雅な気品を湛えた微笑は
人々の心をとぎめかきぬかたにおか
なかつた。
「日御子様だわ。ゆたし達の女王日御子様
よ」
「なんとお美しいんだう。ほら、こ
りとほほえまふたぞ」
清水の遷都の儀式を一目見ようと集ま
つた黒山の人々の間に、歓呼の声か
沸き上り、
あふれだす溜め息があつた。
こ人なにも熱狂的な歓迎の中にあつて、

しかも絶え間なく続いた。

佳か

斗米は、感慨深く思わずに、おれなかつた。
難斗米は、妻との別離、~~な~~と、魏国への朝貢。
の~~こと~~と、新都造営の~~こと~~となど、こゝまでの様
々なことを思い返していた。
大君の、日御子の御言葉をつつしんで承
ることを得、~~新~~帝都築城の~~こと~~に、~~た~~つろいでいたタクマ
加原の御殿をおいて、泊瀬の白川に舟を浮か
べ、対岸へ渡り、私が行く先々に流れる川の
八十隅（数多くの曲り角）全てにおりて、萬
度、タクマガ原の都の内なる貴女様を想つて
かへり見をしながら、日の暮れるまで玉梓の
道を行き来したものでした。一途に貴女様のことを思
てのことでありました。合志の都の東北方、佐保川に
いき至りて宿をとつて、いる夜の上に、朝の月の
光がさやかにさして、いると思つて眺めると、
真白に夜の霜が降り、かっしりと硬く川の水
が氷つて、いることもありました。そんな寒い夜で
も、体むくことなく、毎日毎日通つて作つた五重
の垣の内奥なる御殿に、いつまでもおいで下
さい大君よ。私も通ひましよう（万巻一
七九参照。作者未詳）

中臣
なれとみ

さくろく 876

2021

またも
全く以て
電

成り行きよ
1994 13行

「日御子」がその宮殿へ向かつておられる

思いがけなくも、
なてしまったので、夫・難斗米（中臣）はいわば当然
の成り行きとして、その女王に仕える忠実な
臣下となっていた。
難斗米は日御子の臣下以外の何者でもなく、
臣下になり切らなければならなかった。
だから、女王と梯隼とが契りを結んだとい
ても、難斗米にとつてはどのようなもの
全く為すすべもなかたであつた。如何せん
「私の心の内なる妻よ。ああ、いよいよ淫
かに遠い、遠い御方になつてしまわれた」
錯綜した複雑な思いを胸に、難斗米は、
なたの新城を見つめていた。
女王、日御子にお喜びいただこうと思
い、私はあの宮殿を築いたのだ。そして今
だけで満足すべくないか。
新城の方へと日御子の遷都の列は徐々に進ん
でゆく。難斗米は、喜んでゐるのかどうか詳し
かでない。クシヤクシヤの顔をして、自分自身

言い聞かす 87

盛大 1226

2,022

「小野小町」父のニモも君とも云ふ由
石①-47
仲哀天皇は香椎

2020 9月

の心に言い聞かせようと務めた。

米

御遷宮

盛大な威容を整えた遷都の列が、はてしなく続いていった。

やかて、御輿は、タクマガ原の北のはずれに到った。

そしてここに、皇后が少いお疲れになったので、小休止となった。

トル

あるいはこの時、二代目の神功皇后（東彌

呼）は、迫かに古郷を望み見て慨嘆した。

「タクマガ原を離れて北の方の新しい都

へ去って行くか、行ってしまったならば、君

父仲哀天皇）が住みあたりは、もはや見えな

いであろうなあ。

と仰せられたのではなからうか。

「七八（但し）春二月とする」参照

木もーかいたら、タクマガ原から合志原への

どの数多くの古墳がある。そして、このあた

りの地勢は、丁度、仲哀天皇陵など多数の古

239年12月 巻が朝百
 240年春 来儀 <8月11日不知火 3層 1384P
 241年春 花の宴 むこなる 不知火 1651P
 241年8月1日 不知火
 242年8月1日 不知火
 (2013P)

2,023^P

ミナ
 耳かき
 ハンカチ
 黒山 2019
 189

境がある畿内の河内と対比して考えら小よう
 か。もととはいえ、いうまでもなく、想像の域を出
 るものではない。 *

と下 昇んなとき 梯儼は 大群集の中に
 梯儼さまし

と呼ぶ声を聞いた。声の方を探すと、――
 幾分瘦せては見えるものの、なつかしく美

梯儼は、赤女の姿が目にとまった。人込みの中に分け入
 り、赤女の手をとった。

赤女。赤女、ずいぶん苦労していらっしゃるだね
 梯儼様。お変わりもなく、嬉しゅうござ

います。L

梯儼が滴り落ちていった。

「そうだ。ちよつとばかり先の夕とはなる
 次(つぎ)の魏暦(ぎれき)(陰暦)七月末の晦の日

に、私は王城を出てお前に会いに行くことに
 しよう。――

去年七月の晦の日に

H30(2018)5.19(土)~5.21(4回)
H31(2019)1.17(木)~1/19(3回) 凡士に418⁷

2.024^P

①652⁷ 前回の不知火

下1/9
1/8

も、私は日御子を宮城に残して、こわごわな
からあの不知火の火を見に行つたのだがね、
「……やっぱり龍灯は恐ろしいものだ
った。もう女王の操る龍宮の火など見たくも
ないし、こんどの七月晦こそ、お前に会える
またとない良い機会だと思ふのだよ。何ぞ、
旨いものでも用意して待つていてくれない
か」
「まあ嬉しい。……ええ、私、指折り数
えてお待ちしておりますわ」
「きつと、きつと訪ねていくからね」
「梯は、こう言つて赤女の手を握つかりと
握り締めると、再び輿の内へと戻つていっ
た。
それは、……全くあつという間の出来事
だつた。そして、急に留めた者など誰もいな
いようであつた。――山城国風土記逸文「入宇
治橋姫」条参照」

※

大
取
ひ
き
と

1つかり
2024年

2036
抱き締めていて
アブル

紀上569P

2,025P 1/2

「神宮」パンフレット5P 浮橋の両端に鳥居がある
五石 石④-263P
2031年 浮橋

新しい王宮

小休止の後、遷都の行列は、再び長々長々

足どり歩いていった。北の方へと、やがてゆるやかな

白川のほとり、河原の大枝が盛大に行なわれた。今の堀川

の岸辺では、川原の大枝が盛大に行なわれた。今の堀川

こうして梯儼らは、洛水（堀川）には、王が

橋を渡りはじめた。洛水（堀川）には、王が

一杯敷き詰められていた。（万巻十八ー四〇五し

七参照）

「ほう坊や。お前のお父様が、浮橋を渡っ

ておいでになるわ。ほらほら、あそびよ。浮

着在平外（浮島の平らな処）に降り立たれた

あのお方が、お前のお父様なのよ。よく見て

おく人のよ。ーーーーー

それは、あの愛姫の声であつた。

愛姫は、胸に抱いた乳飲見に向かって、涙な

から語りかけ続けるのだ。

から語りかけ続けるのだ。

2,025^P - 7/2

カラー

・頁の上半分
に、大きく
はみ出し
掲載下す。



1329

1429

写真図版 351

「かわら」おほはえ
川原の大祓

『伊勢神宮』別冊太陽、日本のこころ208、平凡社、2013年5月19日発行、142頁参照、
228^P

H4.1.3(金) 福原神宮参拝 望江
560.2.6 ④ 神宮 112フレナ
屋敷 2219

1人1人み3083
神韻縹渺
1898
(かすては、お世)
2.026 P-1/4

伊勢神宮 167
「太陽」11~12
木綿四手 年下313
みはるか 見 齊
2130
送むに月渡す
3381 楼内 2356
24649の内

上の上の
天 浮橋を渡り切ると、そのすぐ向こうには、大
な楼門(羅城門)に相当する外郭城南端の門
が聳え立って、夕陽にほんのり染まっ
いた。
別して、天空に突っ立つその美しい楼門から
左右へ連なる城柵は、遙か遠く、目の届く
限りまで真直ぐ続いていった。
外郭城城門の巨大な柱、および立ち並ぶ
城柵の柱全てに、柵の枝が取り付けられ
ており、それぞれの柵の枝から垂らされた木
綿四手が神韻縹渺として風にゆらぎ、一
きらびやかな王都に、威厳とおごりかさを添
えて、いるように拝された。
外郭城の南門(羅城門)内の京域は、
つて入る左都城内は、道路によってま
正方形に整然と区画され、あり、王城へ日々
通うことになる者達の家屋が、ずらりと軒をつ
らね、東西の市場の場所も、ずらりと定められて
いた。

すて
改定版 2行

伊勢神宮 63, 65, 67
 菅 460° 1582' 1303' 2.026°-2/4
 伊勢神宮 59 60 伊勢神宮 59 60 伊勢神宮 59 60
 正立並に 1378° 伊勢神宮 59 60 伊勢神宮 59 60

御道の遙かなたには、王城が巖然とした姿を見せており、十二の通門はもうすでに十二の氏族によって固められていた。

二の氏族にあって固められていた。

王城の正門である「板垣南御門」(宮城門)外門を入ると、その奥に南宮の正門である「外玉垣南御門」(宮門・中門)があつて、この御門の内が宮城(南宮城)となつてい

あり、幾つもの庁舎が立ち並んでいた。

南宮城以下、第14・16図参照

その奥に、大極殿門(明門)があり、そのすぐ奥に、巍然と聳つた大極殿があつた。

内玉垣南御門の内へ入り、大極殿内を通り抜けて、さらにその内なる「瑞垣南御門」をくぐると、そこが清浄の極地ともいうべき内院(内裏)である。

(写真図版 352・353 参照)

内院の中央には、菅葺きの屋根に堅魚木を並らべ、内削ぎの千木を戴いた御正殿があつた。

(伊勢神宮 桜井勝久進、学生社、五九六頁、二六頁参照)

2,026^P-3/4

・右頁上半分に
配置する。

・限定一杯大きく
掲載下さい。

L_1
 $L_1=L_2$ とする。



← 本からの
コピー

120G
140Gコマ
中心ふりわけ
写真図版 352 伊勢神宮 (内宮) 御正殿の千木
← 130Gコマ
わたなべおのめ
『渡辺義雄の眼』伊勢神宮 渡辺義雄 講談社 1994年8月25日発行 14頁参照 231^P

2,026P-4/4

- 上半分
- ・左頁に配置する。
 - ・左右をばみ出し掲載下さい。

$L_1 = L_2$ とする



140G ゴチ
中心より外

写真図版 353 伊勢神宮 (内宮) の御正殿

120G ゴチ
130G ゴチ

『日本の神社』伊勢神宮、デアゴスティーニ・ジャパン、2014年2月25日発行、8頁参照。

・^{はたてばしら} 掘立柱と^{かや} 萱葺きの屋根が特徴的である。^{むなちばしら} 棟持柱によって支えられた屋根の両端には^{うちす} 内削ぎの千木があり、^{ちぎ} 棟の上には^{むね} 魚堅木が10本並んでいる。

せいけん 1249^{伊勢神宮} 193^{「東塔の上」とあるが} 155^{おきた} 328^{重立つ} 2009^{僅す} 2203^{威儀を正す} 91^{みかど} 190^{朝廷紀下}
 生絹 193^{「伊勢神宮」} 155^{おきた} 328^{重立つ} 2009^{僅す} 2203^{威儀を正す} 91^{みかど} 190^{朝廷紀下}
 2029^市 2027^P

時頃であらうか。城内のあらゆる照明が一斉に
 ほとんどなく、定められた時刻となった。現在の午後八
 時頃であらうか。城内のあらゆる照明が一斉に
 生社、五五頁、一九三頁へ遷御の儀、参照
 用いていた。「伊勢神宮」桜井勝之進、学
 まとつており、他の者達も、衣冠に明衣を着
 上にさらに明衣（白の生絹でつくった袴）を
 大夫などの重立った者達は、最高の礼服の
 引き継がれてゆくことになる広場であった。
 とり行う所であり、一年中の数々の儀式を
 新年の朝賀を始めとする
 朝儀を催し、年中の数々の儀式を
 板垣南御門を通り、外玉垣南御門をも通って
 朝庭の奥の方へと進んでいった。
 引きつづいて朝臣たちが威儀を正し、身
 を慎みながら次々とその儀式の為の朝庭
 ある口中重に入ってきて、ずらりと並んだ
 最く警固されている王城門の内に入影は無
 く、この小からの長い繁栄を待ち望むかのよう
 な、だ深閑とした静けさのみが漂っていた。
 * あたりを覆い尽くしていた。

（宮城門）

3月10日 白浄衣 1131P
御階 580P
526P

2,028P-1/2

2017年 3月10日
高御座 1334P
(大極殿)

静寂 1222P
物言 1222P

登つてゆかされた。その御様子は、まるでハリー
高御座の御階を、ゆっくりと、ゆっくりと
日御子は更に、大極殿の中央に設けらるる
た。ひのき、さら、大極殿の中央に設けらるる
な。月明かりの中に、厳かな神気を帯びて見え
に。なる。白浄衣の、日御子の御姿が、ハリー、臍ろ
大極殿門を通り、大極殿の広い階をお昇り
人やりと浮かび上がった。静静と揺らめくよう
難斗米に導かれつつ、静静と揺らめくよう
日の月の光の中に、大極殿の壮麗な殿舎がぼ
か、ギイェと軋んで開き、淡い十
その時、内玉垣南御門（大極殿門）の御扉
難斗米の音が、庭内に重々しく響き渡った。
「いざ。大極殿の内なる高御座へお昇り遊
日御子の前に畏まり、こう言った。下さいませ
者である難斗米が進み出た。そして、恭しく
ここに、新城築城に当たった最大の功労
静寂の中にひっそりと潜まり返った。
に消されて、ハリー、森羅万象、一切のものが

田舎まり

うかが 元176¹ のりとごとき
規 のそりて 祝詞言 1753¹
（神を祭り神に申す）

「小町」94¹ 長久の平安を祈願 晴 元1830¹
（その77はなかなた） 神とし 737¹ 四牛 元995¹
2.028¹-3/2 （晴の場所） 元1449¹ 1396

のりと 元1753¹
祝詞 神を祭り神に申す
祝詞することば

た	る	て	上	い	神	か	元1753 ¹	消	く	い	の	電	続	く	久	き	今	日	日	串	ひ	よう	天	て
り	（こ）	、	か	う	々	み	1753 ¹	え	揺	祝	の	の	い	夜	の	の	日	の	子	を	う	女	ん	
ま	と	大	終	た	を	祭	り	惑	蕩	詞	（	と	て	の	静	の	の	は	手	ひ	あ	が	ど	
い	の	極	った	時	祭	り	、	っ	う	）	唱	て	難	の	寂	中	の	二	に	と	ら	、	無	
な	で	殿	た	、	祭	り	、	た	う	）	え	祝	斗	の	の	を	の	の	一	打	と	た	限	
な	き	の	の	女	祭	り	、	だ	に	）	て	福	米	の	の	祈	の	晴	て	ち	う	の	天	
っ	な	奥	王	日	祭	り	、	い	漂	）	福	（	中	を	日	の	遷	都	な	び	く	空	へ	
た	い	の	御	子	祭	り	、	、	い	す	る	）	臣	を	御	の	の	喜	四	手	を	）	舞	
	、	方	は	高	祭	り	、	か	か	す	こ	）	）	牙	子	の	の	び	と	り	か	）	い	
	、	ハ	高	座	祭	り	、	さ	余	か	と	）	の	え	の	祝	の	を	と	け	た	）	る	
	、	一	座	から	祭	り	、	韻	韻	が	）	）	の	渡	の	詞	を	申	し	な	）	）	か	
	、	朝	高	祭	り	、	）	を	引	）	）	）	）	り	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	庭	座	祭	り	、	）	を	い	）	）	）	）	流	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	から	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	れ	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	て	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	
	、	）	祭	り	、	）	）	を	）	）	）	）	）	）	の	の	の	述	べ	）	）	）	の	

④ $1317^{\circ} - \frac{3}{7} \circ \text{E}$

「伊勢神宮」櫻井
65^P, 195^P 1斤 榎澤保雄
63年 2,029^P

まはゆ
目映いはかりの

日御子は、五重の門のうちの最奥の門、日瑞垣南御門に通つて、御正殿へとお入りになつたのだつた。

息詰るようなひとときであつた。正しく、中重の庭上にひれ伏す朝臣達にとつて、それは、麗しい夢かとも思へたし、幻想の世界における出来事であつたかとも思へた。

——かゝるまだ、廷臣達は、朝廷上に端座し続けた。時加、静かにゆるやかに流れてゆく。

やがて、——端垣南御門の内なる御殿に、一点、明かりがともつた。

と、次から次へと燈火の数が増えてゆき、御正殿中の煌煌とした光が四方に照り徹した。

さらに、瑞垣南御門内の南庭にも煌煌と、**た**篝火が燃え上がつて、御正殿を照らした。

遙かな**無**窮を指し示す内削ぎの千木と、横たえた十本の堅魚木とを棟木の上に戴いた御正殿が、——新都城の最中に、美しくも威厳をもつて輝き渡つた。

×内長
御座山
御貼
おひき
麻
敬請

さんさん
燦燦 2019/4/17
2026-2/2, 030
大極殿をH7

高士 伊勢神宮 67P
全画トV
お夜え 1146P
きびくおごかること
HV

改新

へ何と... 御正殿の四面に... 簀子縁... 櫺干... 色とりどりの... 燃え盛る... 大極殿は、中... 一方、善美の限りを尽くした大極殿は、中... 重の庭燎の炎の色を映して真赤に染まり、... 炎が風に煽られてパツと大きく燃え上... かる度に、頭上高く、一際鮮やかさを増した... こうして、魏国洛陽城都の口太極殿... 模したこの大極殿... 倭国の王都に燦然とした輝きを放ちつづけて... ゆくことになった。... そーていまはもう、新節城の全てが、光の... 中にあつた。外玉垣南御門の外に群れなす人... 久は、この壮大な新しい王城への遷都を心から... 喜び合い、怒号にも似た歓声をあげ、湧きに... 湧き、踊り狂い、酒に酔い痴れて、愉快に残

全画トV

2018P
18P

ぐるっと回り

くぐり

＊写真は夜ではなく昼から、この後に掲載したい
トV

行われた 2025 P右頁

2,031 P

改行

リの一^{いち}夜^やをあかすのだった。(「伊勢神宮」
桜井勝^{さくらい}え^え進^{しん}、学生社、一九二し一九五頁へ遷^{せん}
御^ごの儀^ぎ✓^{参考})

＊

(「伊勢神宮」桜井勝え進、学生社、一九五頁、二三八頁参照)

さらに遷^{せん}御^ごの翌^{あした}日には、大御饗^{おほみけ}祭^{まつり}、奉幣^{ほうへい}
の儀^ぎ、古物^{こぶつ}渡^{わた}し、御神樂^{おみかぐら}御饗^{みけ}、御神樂^{おみかぐら}の儀^ぎな
どの数々の儀式が滞^{とど}りなく行^{おこな}われた。

滞^{とど}りなく

そしてここによやく、新帝都^{しんてい}への遷^{せん}御^ごの
儀式^{ぎしき}も無事^{むじ}済^すみ、日御子^{ひのみこ}と梯^{てい}儼^{げん}の二
人は、この真新^{まにあたら}しい宮殿^{みやとん}で楽^{たの}しい日々を送^{おく}る
ことになった。

毎日^{まいにち}であつた贅^{ぜい}を凝^こらし、豪奢^{ごうしゃ}の限^{かぎ}りを尽^{つく}
くした禁裏^{きんり}の内^{うち}では、大宮人^{おほみやびと}達が笛^{ふえ}や琴^{こと}など
を奏^{そう}し、あでやかな女達^{おんなたち}が華麗^{かうれい}な領巾^{りやうきん}を靡^{なび}か
せて舞^まい踊^{おど}り、梯^{てい}儼^{げん}はさながら五色^{ごしき}の彩雲^{さいうん}の
中で、天上界^{てんじやうかい}の男^{おとこ}女^め達^{たち}と共に群^{ぐん}れ集^{あつ}い、遊^{あそ}び

H30(2018)5.20(日)~5.21(月)

下

まどおえ
待ち遠し 2081P

おれんせん 2021P
前に述べ
2032P

うかが
窺う 元146P

のぞいて様を見る。 ④1303P ⑤2026P

戯れに、いりるかのよう思へた。
かゝり、内から三つ目の門の外玉垣南御門
引き離つ、天上界と下界との隙たりは、あ
まりにも大きかつた。
梯橋には、もう下界の様子など窺い知るこ
とすら不可能となつてしまつていた。
ときとして、赤女や愛姫や、愛姫が産んだ
はすの我が子のこと等について、あれやこれ
やと思ひ悩む時もあった。
女王曰、御子の夫であるとはいへ、全く自由を
与えられていない梯橋にとつては、悲しいか
な、どうにもならなかつた。
へー、魏暦七月の晦の日が待ち遠し
い、
梯橋は、心の内に、そつと思ひつた。

*

おれんせん

おれんせん
おれんせん

おれんせん